

『INCHの楽しい仲間たち』 vol.9 その3

世界の森林減少とその課題を解く (3)

～フィールドワークから考えるインドヒマラヤの魅力～

長濱和代 (東京大学大学院 新領域創成科学研究科 博士課程)
 (10月から: 目白大学 客員研究員・非常勤講師 東京成徳大学 非常勤講師)

チャレンジ5回目にして(今までに不採択が4回)大学研究科から海外渡航奨励金を得ることができたので、9月上旬からインドへ渡航する準備をしています。今回の目的は2つあり、1つ目は2週間の滞在中に博士研究のプレゼン会をして大学での自分の研究をアピールし、研究者との親交を深めてネットワークを構築するためです。2つ目には、私のインド渡航(今回はプレゼン会ですが、いつもは研究調査)に興味を持っている方々がいて、インド研究&フィールドワークに関するツアーを開拓するためです。

ツアーに関して、初インドの方には「私のインドツアーは過酷ですよ。」と最初に言い置きをしますが、それでも同行されたい方には、航空券と宿を手配しています。仲間たちには「私たちも長期休業中でなければ、そのフィールドワークと一緒にいきたい!」と予想外にも賛同してくださる方もいます。世界中の調査地へ、研究ボランティアを派遣している国際環境 NGO アースウォッチのような組織があり(ボランティアは自らお金を払って研究ツアーに参加。最近のアースウォッチの国内調査ツアーは、公開後すぐに満員御礼の状態とのこと。)、他人のフィールドワークは自分に責任が問われないので、楽しく過ごすことができるのかもしれない) *1。

前置きが長くなりました。今回はインドヒマラヤの魅力について、書き尽くすことができなかったため、その続きを書きます。

1. 森の生活にかんする伝統知

私は、森の資源が身近な生活にどのように役立っているかを地域の人たちから聞き取りしてきました。薪炭のような木材や飼料(家畜の餌)だけでなく、歯磨きの代わりにする草、たばことして吸える葉、子どもが悪さをしたときにお仕置きをするための触ると痛い草など、身近にある森から採取した草葉が生活に活用されています。例えばニームという、日本でも知られるようになった樹木は薬効の特性があり、その葉、実、樹皮が伝統的治療薬として使われています。心臓病や高血圧だけでなく、解熱、鎮痛効果があり、関節炎やリュウマチにも効果があります。さらに癌や潰瘍、口内炎などにも効くそうで、葉の部分が錠剤となり国内でも市販されています。最近歯磨き粉やせっけん、フェイスクリームも見つけることができるようになりました。このように薬効がある樹木や草本類は、地域だけでなく外部から(海外も含む)も注目されています。今世紀に入ってから「バイオパイラシー: グローバル化による生命と文化の略奪」(ヴァンダナ・シバ 2002)で報告されているように、先進国の資本により、古くから伝わる薬草などの伝統知識が利用され、医薬品や食品開発を通じて途上国の利益が独占されるという事態まで起きるようになりました。



ニームの葉と実

デリー空港でも買える
ニームの錠剤

2. 地域の人々の魅力

民族的には多様で、インド・アーリア系（コーカソイドと言われる北部に多い白人人種）、ドラヴィタ人と言われるモンゴロイド（中部から南部に多い黄色人種）、タミル人と言われるオーストラロイド系（南部に多い肌の色が黒い南方人種）、そして少数民族はさらに細分化されます。私の訪れる東北部ではアーリア系が多く、日本人と比較すると顔頭が小さく目が大きくて、とてもキュートに見えます。一緒に写真を撮ると、私の顔の大きさが 2 倍近くに見えるので、最近の自分は、彼女たちよりも少し下がって写真に写るようにしています。女性は、20～30 代で未婚の時は大概スリムな体型をしていますが、結婚して子どもを出産するとふくよかな体型になる場合が多く、幸福の象徴としてもこのような体型がやせ型よりも好ましいとされているようです。

またこちらから道を尋ねたりなどの質問をすると、丁寧に答えて下さるインド人は多く、気持ちを通じ合うことが多々あり、日本人とも親和性が高いと思われま。初めてのインド旅では、朝の散歩中に道に迷って近くのご婦人に道を尋ねたところ、英語が通じなくてご主人が現れ、さらに小学生の息子が呼ばれて通訳をしてくれて、話が盛り上がって、朝ごはん自宅に招待いただきました。（その息子も昨年から大学生となり、私をオートバイに乗せて自宅まで送迎してくれるほどに成長しました。）こうした親和性は、東洋的気質の共通性があるのか、宗教的な考え方によるのか等と考え、ヒンドゥー教と仏教的な思想は共通点があるように思われますが、この仮説は検証が必要でしょう。

しかしながら、お金儲けのために、向こうから声をかけてくださるインド人が少なからず存在するのも確かです。インドを訪れる時、とりわけ大都市中心部での積極的な声かけには、十分にお気をつけください。

【私が魅力される女性たち】

森に行くと、女性のたくましさ仕事ぶりにはいつも感動を覚えます。彼女らは朝早く（朝日が出た後）起きて、すぐに家畜小屋から子どものように可愛がっている牛や山羊たちを外へ出して飼料を与えると、掃除をして 3 度の食事を作ります。畑仕事の他に、朝晩の飼料の収集、近くの泉へ飲料水の水くみ、薪の収集など、晩まで仕事が続きます。またわずかな休息時には、自分がチャイを飲む時に居候の私の分まで作ってくれる等、目配りと気配りはすばらしいと思います。

道路の補修の時（前回のコラムの写真を参照）は、土でできた道に石を敷いてコンクリートで固め、道の整備をするのに、男性ではなく女性たちが多く賑やかに集まっていたので、「なぜこうした力仕事に男性が取り組まないのかしら？」と聞けば、「女性は何でもできて有能だから」と冗談を交えて答えてくれました。ヒマラヤ山麓の多くの世帯では、男性が都市や海外へ働きに出ている場合が多く、政府からお金がもらえる村落活動は、家にいる女性が参加するケースも多いようです。

3. 現地での食べ物

インドというカレーを思いうかべる読者が多いと思います。たしかに毎日、自分は滞在中に毎日カレーを食べていますが、実に様々なカレーがあります。

誌面がこれで尽きてしまったので、今回はフィールドワークを通じた現地での食事の楽しみ方から、続きを書いていきたいと思っています。



D村の女性たちと（2014年、左から2人目が筆者）